The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	活用と活用形の通時的研究
Author(s)	山内, 洋一郎
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45958
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【33】

氏　　名	山　内　洋一郎（やま うち よう いち ろう）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学 位 記 番 号	第　１９６２７　号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学 位 論 文 名	**活用と活用形の通時的研究**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　蜂矢　真郷 （副査） 教　授　金水　　敏　　助教授　岡島　昭浩

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、院政・鎌倉時代を中心とした日本語の活用語（特に、動詞・助動詞）における、活用の問題としての二段活用の一段化と、活用形の問題としての連体形終止の一般化とを、通時的に考察する国語学的研究である。

序章「古代の動詞活用と文終止法」は、全体の序に当たる。Ⅰ「活用の通時的研究」は、第一章「二段活用動詞の一段化」（第一節「院政鎌倉時代における二段活用の一段化」、第二節「擬一段化及びエル型動詞」、第三節「広本節用集の二段活用の一段化」からなる）、第二章「下一段動詞「蹴る」」、第三章「ナ行変格動詞「いぬ」「しぬ」」からなり、Ⅱ「連体形終止法の研究」は、第一章「奈良時代の連体形終止」、第二章「平安時代の連体形終止」、第三章「院政期の連体形終止」、第四章「連体形終止の関連語法」（第一節「終助詞「は」の成立」、第二節「助動詞「うず」」、第三節「終止・連体形と助動詞「ベシ・マジ」（副題略）」）、第五章「連体形終止法の逆行現象の否定（副題略）」からなる。末尾に「あとがき」「索引」を付す。（400 字詰換算約 680 枚）

Ⅰは、下二段活用の下一段化と上二段活用の上一段化とを比較し、また、音節数に注意し、さらに、活用の行にも注意して、一段化は、上二段活用の方が下二段活用より早く、一音節語の方が二音節語より早く、また、ア・ワ・ヤ・ハ行の母音系動詞に多いことについて述べている。

Ⅱは、連体形終止法を体言相当の準体句が詠嘆的にそのままで表出されたものととらえ、その方向から奈良時代から院政期（一部、鎌倉時代）にかけて考察し（第一章～第三章）、それに関連する語法、特に連体形終止に収束しないと見られる助動詞「うず」について考察し（第四章）、これもまた連体形終止に収束しないと見られるナ変動詞「死ぬ」について考察を加えている（第五章）。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

日本語の活用語の変遷の中で、二段活用の一段化と、連体形終止の一般化とは、二つの大きな変化と位置づけられる。本論文は、その二つについて、院政・鎌倉時代を中心にしつつ必要に応じて前後の時代とともに広く通時的に考察し、変化の過程を跡づける。そして、その二つをそれぞれに考察するのであるが、それぞれを、別個の現象ではなく、連体形終止の一般化が二段活用の一段化の雪崩現象を引き起こす契機であるととらえるように、大きく古代語から近代語への変遷の中でともにとらえようとしているところに、一つの大きな価値があると言うことができる。

それぞれの考察についても、一段化する動詞の音節数や活用する行に注意するなどし、和歌の例における連体形終止の検討に当たり和歌が二文のものと一文のものとを分けて考察するなど、その考察の視点がそれぞれに適切である。その結果として、助動詞の二段活用の一段化が遅れることを、動詞を含めた音節数の多さから説いている。また、考察の対象とする文献も最善のテキストを選ぶようにしている。

二段活用の一段化に関して、下二段動詞連用形＋完了の助動詞「り」の連体形・已然形を、一段化とは別のものとして「擬一段化」ととらえることも特記しておいてよいであろう。

連体形終止に収束しないと見られる助動詞「うず」について、連体形「うずる」の「る」が、助動詞「たり」の連体形「たる」の「る」の脱落などと同様に脱落したととらえることも、有力な一説と見られる。

連体形終止に収束しないと見られるナ変動詞「死ぬ」を、「死にいぬ」＞「死にぬ」＞「死ぬ」ととらえるのはユニークであるが、異論もあると見られて、この説の評価は今後に委ねられよう。

一方で、種々の事情があるとは言え、元の諸論文を一つの論文にまとめ直す際の問題もありはする。用語の定義や、論述の根拠をもう少し詳しく述べてほしい箇所もないではない。誤植が少なくないのは惜しまれる。また、望蜀のことではあるが、「る」の脱落があるものとないものとの差はどこにあるかとか、さらには、訓点資料に連体形終止が見えないのはなぜかなど、本論文の上に立ってさらに検討してほしい事柄もある。

しかしながら、本論文は、活用語の古代語から近代語への変遷を大きく考察したものとして価値のあるものであり、既に本論文の一部を基礎とした研究もいろいろあるように今後の研究者の足がかりとなるものである。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。